

川崎と沖縄を結び

# 「ゆんたく」(語らい) しよう!

六・三三  
沖縄慰霊の日

地上戦で戦われた沖縄戦のことをみんなで考えよう!

かわさきと沖縄のつながりをみつめよう!

基地の問題を、私たちの暮らしから考えよう!

日時：2010年6月23日(水)午後7時～

場所：沖縄そば 「ゆんたく」

第1部 7時～9時 慰霊の日 沖縄一川崎

飲食費(飲み物+おつまみ) 1000円

第2部 9時～ 食べながら、飲みながら、ゆんたくしよう!

飲食代自己負担

<話題提供者> 「沖縄 基地のある生活」(仲宗根真一)

「沖縄一南米一川崎」 (大城正子)

語りと歌 豊岡マッシー (イチャリバース)

※ 席に限りがあります。お電話かメールにてお申し込み下さい。



ゆんたく Tel.044(200)8659  
yuntaku2006@gmail.com

<呼びかけ人>

仲宗根真一・かおり

(沖縄そば ゆんたくオーナー)

根本延浩 (ミュージシャン)

仲松リカルド

(川崎市ふれあい館)

三浦知人 (川崎市ふれあい館)

65年前、戦争の本土決戦の捨て石とされた沖縄。住民を巻き込み、犠牲者20万人。その半数が一般住民でした。鉄の雨といわれた艦砲射撃、軍による住民の暴行、殺害。集団「自決」など、島全体が戦場となった沖縄戦は、6月23日まで3ヶ月続きました。そのことを、日本に暮らす市民が風化させることなく、戦争の愚かさと悲惨さを学び、反戦を誓う意義は大きいと思います。

今、大きく揺れる沖縄の基地の問題。沖縄の人たちは、米軍基地により、再び沖縄が戦争加害の出撃拠点にならないため、立ち上がっています。そして、ヤマトチューの沖縄への差別と切り捨てる意識が、また、沖縄への基地押しつけを後押ししています。今一度、沖縄をしっかりと見つめる必要があるのではないのでしょうか。

川崎は、戦中の軍需産業、戦後の高度成長の働き手として、たくさん沖縄から人を迎え入れてきました。しかし、十分に沖縄と川崎をつなぐ市民交流が育ってきたのでしょうか？

かつて関東大震災の頃、富士瓦斯紡績(今の競馬場付近)で働く沖縄の女工さんたちが、たくさん、亡くなった事実。川崎駅前に、人通りも無いアゼリア入口裏に立つ「石敢當」。沖縄の抱える貧困により、多くの移民を排出せざるをえなかった沖縄の人たちが、南米で味わった苦労を心に秘め、働き人として、沖縄出身者の多い鶴見、川崎に来ている事実。沖縄慰霊の日に、先の沖縄戦の犠牲者をおもい、祈り、沖縄戦を振り返ると共に、沖縄と川崎を結ぶ視点で見つめなおし、語らう場を作りたいと思います。

沖縄方言(うちな〜ぐち)で「ゆんたく」とは「語らい」を意味します。まずは、沖縄慰霊の日を機会として、集い、ゆんたくしようではありませんか？

<話題提供者>

「沖縄 基地のある生活」(仲宗根真一)

沖縄に育ち、殺し殺される関係に身を置く米軍兵士のいる基地の街で暮らす実相を聞きます。

「沖縄—南米—川崎」(大城正子)

沖縄の抱える貧困により、移民を余儀なくされ、南米に渡り、そこで、日系人として、戦争時代の幾多の迫害を乗り越え、今、ワカチューの多く住む鶴見川崎に暮らす日系南米の人の戦争体験を聞きます。

語りと歌 豊岡マッシー (イチャリバース)

イチャリバースは沖縄出身の二人組のアーティストで豊岡さんは宮古島生まれ首里育ちの方です。